日本語助詞「の」の研究

于　　飛

北京師範大学文学院博士後
(Postdoctoral)

第１章　先行研究

１．辞典の説

日本語の「の」について、橋本進吉氏は『国語法要説』の中で、「の」を準体助詞と準副体助詞に分けている。時枝誠記氏は『日本語文法口語篇』の中で格を表す助詞、感動を表す助詞、形式名詞に分けている。また、松村明氏は『日本文法大辞典』の中で、格助詞、間投助詞、終助詞、準体助詞、並立助詞に分けている。これらの説明を見るだけでは日本語の「の」の本当の用法を理解することは難しい。それで、筆者は現代日本語の「の」の用法に限ってまず文献でみていくことにした。

1.1　各辞典の説

1.1.1　『日本文法大辞典』（1971 年　松村明編　明治書院）

松村明氏の『日本文法大辞典』（1971 年）によると、現代日本語の「の」の用法を格助詞、準体助詞、並立助詞、終助詞に分けている。

[１]格助詞

（１）接続

ア．体言につく。

①私<u>の</u>うち

②大学<u>の</u>図書館

イ．副詞につく。

③少しの間

④もっぱらの評判

ウ．格助詞「と・へ・で・から」、係助詞「も」、副助詞「まで・だけ・のみ・きり・くらい・ばかり・ほど・など」、接続助詞「て・ながら・たり」につく。

⑤友達との約束

⑥東南アジア諸国への輸出高

⑦東京での生活

⑧学校からの帰り道

⑨三十分もの遅刻

⑩地球から月までの距離

⑪ここだけの話

⑫彼のみの判断

⑬寝たきりの生活

⑭一万円くらい（ばかり、ほど）のカメラ

⑮イギリス・フランスなどの先進国

⑯よく考えてのこと

⑰ラジオを聞きながらの勉強

⑱入院した子供の看病で、うちと病院の間を行ったり来たりの毎日

（２）用法

〈１〉連体修飾語を作る。

ア．所有・所属を表す。

①私の本

②芭蕉の句

イ．性質・状態を表す。

③緑のリボン

④友人の山田君

ウ．動作の主体を表す。

⑤父の帰り

エ．動作の対象を表す。

⑥判乱軍の鎮圧

〈２〉連体修飾の連文節の中で、主格・対象格を表す。

⑦戦争のない世界へ

⑧なんて話のわからない人だろう

〈３〉助動詞「ようだ」「ごとし」の内容を表す。

⑨今日は真夏のような暑さだ

⑩学則を左のごとし改定する

[２]準体助詞

（１）接続：体言および用言の連体形につく。

①この本は僕のだ

②もっと大きいのがいい

（２）用法：上の語といっしょになって全体を体言の資格をもった語とする。

〈１〉体言について「…のもの」の意を表す。

①この万年筆はどなたのですか

②馬鈴薯は北海道のがおいしい

〈２〉用言の連体形について、「もの」「こと」などの意を表す。

③駅から遠いのが難点だね

④彼の帰って来るのを待っていた

〈３〉用言の連体形について全体を体言化し、下に助動詞「だ（です)」をつけ、「…のだ（です)」の形で、ある事柄について断定的に、あるいは説明的に述べる場合に用いる。口頭語では「ん」となることがある。

⑤眠っているのではなく、目をつぶって考えているのです

⑥これでいいん（の）ですか

　なお、下に終助詞「か」がついて疑問表現に用いられる場合がある。

⑦君も行くのか

⑧あいつは何が好きなのか

[３]並立助詞

（１）接続：体言および「　」でくくられ、一体言に相当するものにつく。しかし、体言に直接接続する用例は少なく、体言には普通「だの」が用いられている。

（２）用法

〈１〉事物を並べあげて問題にする。同類を集めたり、反対のものを比較したりする。

①貸したの借りないのと言いあっていた。

②行くの行かないの、迷って決められない。

〈２〉ある活用語とその否定形とを重ねて上の語の意味を強める。

③いやもう、面白いの面白くないのって。

④走ったの走らないの、ものすごい勢いだった。

[４]終助詞

（１）接続：一般には、終助詞「の」は準体助詞の「の」から派生したもので、活用語の連体形および終止形につく。

〈１〉形容動詞および形容動詞型助動詞の連体形につく。

①何がそんなに不満なの

②さっきから話し中なの

〈２〉完結した文の文末の活用語の終止形につく。

③そのエレベーターは故障しているの

④これはいいの

（２）用法

〈１〉断定表現に用いられ、その語調がやわらげられる。（現代語ではもっぱら女性が用いる。）

①これは田中さんにもらったの

②あの人行きそうもないの

ア. これらを上昇調のイントネーションをつけていえば、疑問表現になる。疑問詞とともに用いられる場合もある。

③その店はどこなの？

④これは田中さんにもらったの？

イ.「の」にアクセントをつけて強く発音すれば、命令的な表現となる。
⑤あなたは心配しないで、勉強だけしていればいいの
⑥そんなに兄弟げんかばかりしていないの
〈2〉終助詞「よ」「ね」「さ」をさらに添えた「のよ」「のね」「のさ」の形で用いられることもある。
⑦これでいいのよ
⑧この辺は静かなのね
⑨何でもないのさ

1.1.2　『日本語教育事典』（1982 年　日本語教育学会編　大修館書店）

日本語教育学会編の『日本語教育事典』（1982 年）によると、現代日本語の「の」の用法は格助詞（準体助詞）、並立助詞、終助詞に分けている。
[1]格助詞
（1）連体修飾として働く節の中にある用言に係っていき、動作・過程・状態等の主体を表す。
①雨の降る日は家で遊ぶ
②戦争の激しいときに生まれた子供
（2）体言類と体言類を結び付ける。
ア．所属先の指定。
③太郎の考え
④図書館の本
イ．性質の指定。
⑤会長の山田さん
⑥木の本箱
ウ．数量の指定。
⑦3 匹の子豚
⑧たった一人の友
エ．主体の指定。
⑨彼の発表

⑩太郎の泣き声

オ．対象の指定。

⑪英語の勉強

⑫自由の破壊

カ．所の指定。

⑬京都の大学

⑭表紙の絵

キ．時の指定。

⑮去年の事件

⑯午前の授業

（３）準体助詞。体言の働きをする。（「の」が名詞の代わりに使われる場合と、節を名詞化する場合とがある。）

⑰きれいなのが

⑱彼が来るのを待っている

［２］並立助詞（「ＡのＢの」の形で使う）

（１）関連のある事柄や対比・対照的な事柄を例示し、例示された事物すべてが以下に述べる事柄に該当し、該当する事柄が更にほかにもあることを暗示する。

①殺すの死ぬのと大変な夫婦げんかだった

②なんのかのと文句ばかり言っている

（２）慣用的な用法で、「用言・同じ用言の否定形」で、その用言の表す意味を強調する。（「…の…ないのって」の形になることが多い。）

③古いの古くないのってお話にならない

④彼は泳ぐの泳がないのってまるで魚だ

［３］終助詞

（１）文の調子を柔らかくし、軽く断定をする。（この場合、下降調のイントネーションで、「の」に卓立をおかない。）

①私もそう思うの

②このところ雨ばっかりなの

（２）命令を表す。（この場合、下降調で「の」に卓立がある。）

③こっちへ来るの

④さっさとするの

（３）質問を表す。（この場合、上昇調のイントネーション。）

⑥一体どうしたの

⑦なぜ泣いているの

[注]「よ、ね（ねえ）、さ」が下接し得る。主に女性が使う。特に、「のよ、のね」は女性専用である。

1.1.3　『日本語大辞典（第二版）』（1995 年　梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義・日野原重明監修　小学館）

[１]格助詞

（１）連体修飾語をつくる。

ア．主語となるものを示す。

①川の流れ

②政治家の汚職

イ．所有・所在・所属などを示す。

③私の本

④下の部屋

ウ．種類・属性・材料・数量などを示す。

⑤料理の本

⑥緑の草原

⑦鉄の板

⑧三本の木

エ．動作の対象を示す。

⑨子供の教育

⑩患者の治療

オ．基準となるものを示す。

⑪橋のたもと

⑫箱の中身

カ．同格のものを示す。（…である…）

⑬看護婦の妻

⑭ビールのよく冷えたやつ

キ．「よう」「こと」「もの」などに続き、その実質的な内容を表す。

⑮山のようだ

⑯未来のこと

（２）述語が連用形で下に続くときの、主語または対象の語を示す。

⑰私の書いた手紙

⑱水の飲みたい人

（３）名詞に準ずる意に用いる。（準体助詞ともいわれる）

ア．（連体形で終わる語句、あるいは連体詞について）それ全体に体言の資格を与える。

⑲スターが買い物をしているのを見かけた

⑳大きいのがいい

イ．（「だ」「です」で受けて）明確な断定・説明・理由などを表す。

㉑これが最後のチャンスだったのだ

㉒ぼくが悪かったのです

ウ．（体言に付いて）…のもの、の意を表す。

㉓これはぼくのだ

（４）並列の意を表す。（副助詞または並立助詞とする説もある）

㉔鉛筆だのノートだのを買う

［２］終助詞

（１）問いの意を表す。

①どうするの

（２）断定の気持ちをやわらげて表現するのに用いる。

②ええ、そうなの

1.1.4　『明鏡国語辞典』（2002 年　北原保雄編　大修館書店）

［１］格助詞

（１）（体言または体言相当句＋「の」の形で）あとに続く体言を修飾限定する。二つの体言は、さまざまな意味の結びつきをなす。

〈１〉ものの性質を表す。

ア．所有者を表す。

①母の指輪

②私の家

存在場所や所属先を表す。

③高台の家

④文学部の学生

ウ．物事の時期を表す。

⑤冬の北海道

⑥三時のおやつ

エ．状態・状況・素材などの特性を表す。

⑦薄幸の人

⑧鉄の扉

オ．数量や順序などを表す。

⑨三人の子供

⑩三つ目の角

カ．資格や立場を表す。

⑪弁護士の田村

⑫三女の綾子

〈２〉相対的な関係を表す。

キ．部分に対する全体を表す。

⑬山のふもと

⑭建物の一部

ク．相対的な位置づけの基準を表す。

⑮食事のあと

⑯事件の三日前

ケ．事柄の推移の基準を表す。

⑰事故の原因

⑱協議の結果

〈３〉事柄の特徴を表す。

コ．物事の具体的な内容を表す。

⑲法律の本

⑳事故の報告

サ．動作の目的を表す。

㉑入会の手続き

㉒旅行の準備

シ．動作の主体や対象などを表す。

㉓娘の合格

㉔水の流れ

（２）（形容＜動＞詞語幹＋「の」の形で）形容動詞や形容詞の語幹に添えて、状態を表す。

㉕永の別れ

㉖麗しの君

（３）（連用修飾語に添えて）事柄の成立に関わる事物を表す。

ア.「名詞＋格助詞」の成分に付いて、その格助詞の意味を元に事柄を詳しくする。

㉗息子への手紙

㉘父からの贈り物

[注]「に」は「にの」とは言いにくく、「への」に置き換わるのが普通。

㉙アメリカに留学する→アメリカへの留学

イ.「について」「に関して」「にとって」など、格助詞相当の連語に付いて、事柄をより具体的に説明するのに使う。

㉚開発についての意見

㉛彼に関しての噂

㉜子供にとっての親

ウ．動詞に「て」や、「て」＋「から」、「まで」などが添えられたものに付いて、事柄の継起関係や付帯状況などを表す。

㉝帰ってからのひと騒動

㉞仕事が始まるまでの小休止

㉟見てのお楽しみ

エ．引用を表す「と」に付いて、事柄の内容を表す。

㊱帰れとの命令

（４）（後に形式名詞などを続けて）それらが表す意味を補完する。

㊲紅葉のような手

㊳ご存知のはずだ

（５）（連体修飾節で使って）節中の述語が表す動作・作用の担い手を表す。

㊴先生のお書きになった本

㊵絵の好きな母

（６）（体言相当の連体修飾句＋「の」＋体言の形で）感情や思考などの内容を同格として表す。また、表現に文語的格調を添える。（文語）

㊶灯火親しむの候

㊷水ぬるむの季節

（７）（体言に付き、後に活用語の連体形＋「の」を続けて）体言の表すものについて、その状態を述べることで、さらにそのものを限定するのに使う。～に関して、～の状態にあるものの意。

㊸コーヒーの冷めたの

㊹靴下の汚れたの

（８）全体を体言相当にする。

ア．（名詞や活用語の連体形について）～（の）ものの意を表す。

㊺弟のを借りる

㊻好きなのを取る

イ．（活用語の連体形について）それが述語となる節を体言化する。

㊼去年会ったのを覚えているか

㊽そこにいるのを見た

ウ．（「のだ」「のです」「のだろう」などの形で）原因・前提・帰結・主張などを解説的、または断定的に示す。

㊾やっと成功したのだ

㊿熱があるのだろう

51これでいいのです

（９）（主として用言に付いて）

ア．（「…の…の＜と＞」の形で）同類のものを対照的に示して列挙する。

52死ぬの生きるのと大騒ぎだ

53行かせるの行かせないのともめている

「…だの…だの（と）」の形でも使う。

54生きるだの死ぬだのとやかましい

イ．（「…の…ないの＜って＞」「…のなんの＜って＞」などの形で）程度が極めてはなはだしいことを表す。

55痛いの痛くないの（って）、飛び上がってしまったよ

56困ったの困らなかったのといったらなかったよ

［２］終助詞（活用語の連体形に付いて）

（１）断定の意を表す。

①今日行きたくないの

②今日は休みなのよ

（２）（上昇調のイントネーションを伴って）質問・確認を表す。

③もう行くの？

④どうしたの？

（書くときは、一般に「？」を添えて１と区別する。）

（３）納得する気持ちで確認する意を表す。

⑤そうだったの

⑥やっぱりダメだったのね

（４）軽く命じるのに使う。

⑦さっさと着替えるの

⑧強い子は泣かないの

[注]：終助詞の「の」は多く女性が使うが、２は近年は男性も使う。４は子供など目下の相手に対して使う。

1.2　各辞典の説の比較

1.2.1　比較

辞典における「の」のいろいろな用法を整理して示すと、表１の通りである。筆者が調査した辞典は以下のものである。『日本文法大辞典』(1971年　松村明編　明治書院)、『日本語教育事典』(1982 年　日本語教育学会編　大修館書店)、『日本語大辞典（第二版)』(1995 年　梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義・日野原重明監修　小学館）と『明鏡国語辞典』(2002 年　北原保雄編　大修館書店）の 4 冊の辞典。次は、辞典の説についての整理を行なっていきたい。

表１　　（○―ある、×―ない）

用法			『日本文法大辞典』	『日本語教育事典』	『日本語大辞典（第二版)』	『明鏡国語辞典』
文法的用法	具体的用法					
格助詞	連体修飾語を作る	所有・所属を表す	○	○	○	○
		性質・状態を表す	○	○	○	○
		動作の主体を表す	○	○	○	○
		動作の対象を表す	○	○	○	○
		数量や順序などを表す	×	○	×	○
		所の指定	×	○	×	○
		相対的な関係を表す	×	×	○	○
		時の指定	×	○	×	×
		同格のものを示す	×	×	○	×
		資格や立場を表す	×	×	×	○
		事柄の特徴を表す	×	×	×	○
	連体修飾の連文節の中で、主格・対象格を表す		○	○	○	○
	助動詞「ようだ」「ごとし」の内容を表す		○	×	○	○
	形容動詞や形容詞の語幹に添えて、状態を表す		×	×	×	○
	感情や思考などの内容を同格として表す。また、表現に文語的格調を添える（文語）		×	×	×	○

用　法		『日本文法大辞典』	『日本語教育事典』	『日本語大辞典（第二版）』	『明鏡国語辞典』
文法的用法	具体的用法				
準体助詞	体言について「…のもの」の意を表す	○	○	○	○
	用言の連体形について、「もの」「こと」などの意を表す	○	○	○	○
	用言の連体形について全体を体言化し、下に助動詞「だ（です）」をつけ、「…のだ（です）」の形で、ある事柄について断定的に、あるいは説明的に述べる場合に用いる（口頭語では「ん」となることがある）	○	○	○	○
並列助詞	事物を並べあげて問題にする。同類を集めたり、反対のものを比較したりする	○	○	○	○
	ある活用語とその否定形とを重ねて上の語の意味を強める	○	○	○	○
終助詞	断定の意を表す	○	○	○	○
	質問・確認を表す	○	○	○	○
	命令を表す	○	○	×	○
	納得する気持ちで確認する意を表す	×	×	×	○

1.2.2　考察

［１］四辞典ですべて○印のついた用法の考察

表１で、調査したすべての辞典で用法として○印のついたものを抜き出して示すと表２の通りになる。

表２　（○―ある、×―ない）

用法			『日本文法大辞典』	『日本語教育事典』	『日本語大辞典（第二版）』	『明鏡国語辞典』
文法的用法	具体的用法					
格助詞	連体修飾語をつくる	所有・所属を表す	○	○	○	○
		性質・状態を表す	○	○	○	○
		動作の主体を表す	○	○	○	○
		動作の対象を表す	○	○	○	○
	連体修飾の連文節の中で、主格・対象格を表す		○	○	○	○
準体助詞	体言について「…のもの」の意を表す		○	○	○	○
	用言の連体形について、「もの」「こと」などの意を表す		○	○	○	○
	用言の連体形について全体を体言化し、下に助動詞「だ（です）」をつけ、「…のだ（です）」の形で、ある事柄について断定的に、あるいは説明的に述べる場合に用いる（口頭語では「ん」となることがある）		○	○	○	○
並列助詞	事物を並べあげて問題にする。同類を集めたり、反対のものを比較したりする		○	○	○	○
	ある活用語とその否定形とを重ねて上の語の意味を強める		○	○	○	○
終助詞	断定の意を表す		○	○	○	○
	質問・確認を表す		○	○	○	○

表２で「の」の文法的な働きを格助詞、準体助詞、並列助詞と終助詞の４つに分けている。この４つの具体的用法は表２の通りである。

［２］×印のついた用法の検討

表３は×印のついた用法である。

表３　（○―ある、×―ない）

用法			『日本文法大辞典』	『日本語教育事典』	『日本語大辞典（第二版）』	『明鏡国語辞典』
文法的用法	具体的用法					
格助詞	連体修飾語をつくる	数量や順序などを表す	×	○	×	○
		同格のものを示す	×	×	○	×
		資格や立場を表す	×	×	×	○
		時の指定	×	○	×	×
		所の指定	×	○	×	○
		相対的な関係を表す	×	×	○	○
		事柄の特徴を表す	×	×	×	○
	助動詞「ようだ」「ごとし」の内容を表す		○	×	○	○
	形容動詞や形容詞の語幹に添えて、状態を表す		×	×	×	○
	感情や思考などの内容を同格として表す。また、表現に文語的格調を添える（文語）		×	×	×	○
終助詞	命令を表す		○	○	×	○
	納得する気持ちで確認する意を表す		×	×	×	○

以下、×印のついた用法について検討を加える。

（１）格助詞

Ａ．連体修飾語をつくる

ア．数量や順序などを表す。

筆者はこの用法を認めない。この用法は表２の性質・状態を表す用法に含めてよいみることができる。

イ．同格のものを示す

筆者はこの用法を認める。

ウ．資格や立場を表す

筆者はこの用法を認めない。これは同格のものを示す用法をみることが

できる。

エ．時の指定

筆者はこの用法を認めない。この用法は性質・状態を表す用法とみることができる。

オ．所の指定

筆者はこの用法を認めない。この用法は性質・状態を表す用法とをみることができる。

カ．相対的な関係を表す

筆者はこの用法を認めない。これは性質・状態を表す用法をみることができる。

キ．事柄の特徴を表す

筆者はこの用法を認めない。これは性質・状態を表す用法および動作の主体と対象を表す用法とみることができる。

Ｂ．助動詞「ようだ」「ごとし」の内容を表す

筆者はこの用法を認める。

Ｃ．形容動詞や形容詞の語幹に添えて、状態を表す

筆者はこの用法を認めない。この用法は性質・状態を表すものとみることができる。

Ｄ．感情や思考などの内容を同格として表す。また、表現に文語的格調を添える（文語）

筆者はこの用法を認めない。この用法は同格のものを示すものとみることができる。

（２）終助詞

Ａ．軽く命じるのに使う

筆者はこの用法を認める。

Ｂ．納得する気持ちで確認する意を表す

筆者はこの用法を認めない。この用法は質問・確認を表すものとみることができる。

1.3　辞典のまとめ

表２と表３の検討を通して、表４の結果を出した。

表４

<table>
<tr><th>文法的用法</th><th colspan="2">具体的用法</th></tr>
<tr><td rowspan="7">格助詞</td><td rowspan="5">連体修飾語をつくる</td><td>所有・所属を表す</td></tr>
<tr><td>性質・状態を表す</td></tr>
<tr><td>動作の主体を表す</td></tr>
<tr><td>動作の対象を表す</td></tr>
<tr><td>同格のものを示す</td></tr>
<tr><td colspan="2">連体修飾の連文節の中で、主格・対象格を表す</td></tr>
<tr><td colspan="2">助動詞「ようだ」「ごとし」の内容を表す</td></tr>
<tr><td rowspan="3">準体助詞</td><td colspan="2">体言について「…のもの」の意を表す</td></tr>
<tr><td colspan="2">用言の連体形について、「もの」「こと」などの意を表す</td></tr>
<tr><td colspan="2">用言の連体形について全体を体言化し、下に助動詞「だ（です)」をつけ、「…のだ（です)」の形で、ある事柄について断定的に、あるいは説明的に述べる場合に用いる（口頭語では「ん」となることがある）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">並列助詞</td><td colspan="2">事物を並べあげて問題にする。同類を集めたり、反対のものを比較したりする</td></tr>
<tr><td colspan="2">ある活用語とその否定形とを重ねて上の語の意味を強める</td></tr>
<tr><td rowspan="3">終助詞</td><td colspan="2">断定の意を表す</td></tr>
<tr><td colspan="2">質問・確認を表す</td></tr>
<tr><td colspan="2">命令を表す</td></tr>
</table>

辞典の説明では、「の」の文法的な働きを格助詞、準体助詞、並列助詞と終助詞の４つに分けている。

２．主な説の検討

ここで、筆者は現代日本語の「の」の用法について奥津敬一郎氏と内間直仁氏の論文でみていくことにした。

2.1　奥津敬一郎氏の「の」についての研究

2.1.1　奥津敬一郎氏は『「ボクハ　ウナギダ」の文法』(1973 年　くろしお出版）の中に「の」を「だ」の連体形ととらえ、その構文論的根拠として４つあることを示している。

第１の根拠：それぞれの主語に対応する述語が「だ」である文が、後続する名詞を修飾する時にその「だ」は「の」にかわることとみている。(P１２７参照)

①a. 雪船が子供だ

b. 雪船が子供の時

②a. 中村さんがとてもよく御存知だ

b. 中村さんがとてもよく御存知の方なんですって

「名詞＋の」には、それに先行する主語その他の連用修飾語が顕在ないし潜在しており、それは「名詞＋の」にかかっているとしか考えられないから、「名詞＋の」は、実は「名詞＋だ」という「だ」型文の述語であり、「の」は「だ」の連体形と考えられる。

第２の根拠：「の」の前には連用修飾語も来る。

③a. ハヤバヤの御返事―御返事はハヤバヤだ

b. タクサンの宿題―宿題はタクサンだ

④（西に向ってする）大追跡→（西に向ってだ）大追跡→（西に向っての）大追跡

⑤a. アフリカからの代表―代表はアフリカからだ

b. 中国との国交―国交は中国とだ

「の」の前に来るのは、本来は、名詞に格助詞のついた連用修飾語、および副詞としての連用修飾語であって、それから格助詞を消去したものが「名詞＋の＋名詞」という形であると考える方がいい。そしてこの点でも「の」と「だ」とはその分布を同じする。つまりうなぎ文の「だ」も、その前に来るものは単なる名詞ではなくて、本来は名詞に格助詞のついたものであった。そのあとで格助詞を消去して「ボクハ　ウナギダ」のような文になるのであった。格助詞の消去について、「だ」と「の」とでは多少のちがいはあるが、これは「だ」と「の」との基本的な同一性を否定するほどのちがいではない。ともあれ、以上のように格助詞に関する特色からみて、「の」が「だ」の連体形であるとする考えは十分根拠づけられる。

第３の根拠：並列接続文構造である。

⑥a. 元気で陽気な子供

b. オーストラリア人で都立大学生のクラーク君

上の２文を比べると、その構造は全く同じである。a 文はもちろん「元気だ」「陽気だ」という形容動詞が並列接続された文の連体形である。

第 4 の根拠 :「の」を「だ」の完了形である「だった」に置きかえることによっても示される。

⑦a. 3 歳の時

b. 3 歳だった時

⑧a. 子供の時

b. 子供だった時

「だった」は「の」と全く同じ環境に現れ、意味の上でも、「だった」は完了時制を明示しているだけのちがいだから、「の」は「だった」に対応する未完了時制の「だ」の連体形と考えるのが自然である。

2.2.2　奥津氏は『「ボクハ　ウナギダ」の文法』(1973 年　くろしお出版) で、「の」の意味用法を、大槻文彦氏 (1897) の１０種類、三矢重松氏 (1908) の１６種類、国立国語研究所 (『現代語の助詞・助動詞』　1951) の２０種類をまとめ直して、次の通りで２１種類に分類した。

（１）所有

①ボクの車

②社長の別荘

（２）作成者

③大鵬の六連覇

④正宗の名刀

（３）所属の団体

⑤名古屋大学のＫ教授

⑥自民党の佐藤総裁

（４）関係の基点

⑦車の前

⑧宴のあと

（５）存在の場所

⑨枕元のお盆

⑩ワルソーの東欧外相会議

（６）抽象的な場所

⑪西欧とソ連との間の交渉

⑫陳毅将軍指揮下の第３野戦軍

（７）選択の範囲

⑬新制中学卒業生の大半

（８）存在の時刻

⑭明春の参院選挙

⑮ヒトラーやムソリーニ時代のイワユルファシズム

（９）性質・性格・状態

⑯20 歳の青年

⑰バラック建ての売店

（10）材料

⑱丸太棒の橋

⑲木綿のきもの

（11）数量・順序

⑳100 名の参院内勢力

㉑少数の大資本家

（12）サ変動詞の語幹が名詞に続く

㉒本社後援の国際マラソン

（13）形容動詞に準ずるもの

㉓悪質のインフレ

㉔多様の流通手段

（14）後続体言の範囲・領域

㉕母乳以外の食物

㉖明治維新以来の課題

（15）目的の事物・関与物

㉗客寄せの愛嬌

（16）同格

㉘御主人のテイラー軍曹

㉙生活補助費の名目

（17）形式名詞への接続

㉚国民全体のための教育

㉛プロレタリア独裁の下

（18）後続するサ変動詞の主語

㉜Ａ博士の指摘

㉝家内のお産

（19）後続するサ変動詞の目的語

㉞ベルリン西欧地区の封鎖

㉟公共土木事業費の削減

（20）「ようだ」「ごとし」で受ける

㊱リスのような素早さ

（21）形容「～のような」

㊲夢の世の中

これらの用法をふまえて、奥津氏は「だ」の働きから、「の」との関係を次の通りに解釈した。

（１）所有の「の」は次のように解釈できる。

①a.（あの）車はぼくが所有している→（あの）車はぼくだ

b. ぼくの車

例えば、いくつかの車が並んでいるのを指して、「あの車は誰だ？」とその所有主を尋ねることはあるだろうし、それに対して「あの車はボクだ」と答えることができるだろう。この「だ」型文の主語である「車」が、被修飾名詞となって「ボクの車」ができたと考えられる。

（２）「作成者」としての「の」は簡単である。次に示すように、作成の行為を表す動詞が「だ」で代用され、その「だ」型文が作成物である名詞を修飾したものと考えられる。

②a. 六連覇は大鵬がつくった→六連覇は大鵬だ

b.　大鵬の六連覇

③a.（その）名刀は正宗がうった→（その）名刀は正宗だ

b. 正宗の名刀

（３）「所属の団体」を示す「の」。「名古屋大学のＫ教授」のあいまいさはすでに述べたが、「所属」を示す場合は、次のように考えられる。

④a. Ｋ教授は名古屋大学に属する→Ｋ教授は名古屋大学だ

b. 名古屋大学のＫ教授

（４）「関係の基点」。この場合の被修飾名詞は、「前」「後」「上」「下」など相対名詞とでも呼ぶべき特別な名詞である。「車の前」「宴のあと」などの「の」は、あるいは「だ」の連体形としてではなく、はじめから連体助詞とすべきかも知れないが、次のように「だ」型文の連体形として解釈することも可能だ。

⑤車が走って来る前→車だ前→車の前（に子供が飛び出した）

⑥宴が終わったあと→宴だあと→宴のあと

（５）「存在の場所」。（６）「抽象的な場所」。５と６はいずれも一種の空間を表すものとして扱うことができよう。

⑦a. お盆は枕下にある→お盆は枕下だ

b. 枕下のお盆

⑧a. 交渉は西欧とソ連との間で行われた→交渉は西欧とソ連との間でだ

b. 西欧とソ連との間での交渉

（７）「選択の範囲」。「選択の範囲」という意味がはっきりしないが、例としてあげられている「新制中学生卒業生の大半」は、「新制中学生卒業生」の全部の中の「大半」という意味で、全体に対する部分を表す相対名詞である。つまり

⑨うちのおやじは稼いで来る半分は飲んでしまう

のように連体修飾文が全体の量を示し、その一部の量―例えば「半分」―を被修飾名詞とする構造である。但し、「新制中学卒業生の大半」の場合、「新制中学卒業生だ大半」という「だ」型文の連体構造としても、その「だ」

はどんな述語の代用であるのか、どうも考えにくい。従って述語代用形ではない単純な「だ」型文の連体形か、または「だ」の連体形でもよい本来の連体助詞の「の」と考えるべきかも知れない。

（８）「存在の時刻・時」。「存在」に限らず、何かの出来事の時を示す場合は簡便で、次のように考えればいい。

⑩a. 参院選挙は明春行われる→参院選挙は明春だ

　b.　明春の参院選挙

⑪a. 入学試験はあしたある→入学試験はあしただ

　b. あしたの入学試験

（９）「性質・性格・状態」。(13)「形容動詞に準ずるもの」。この二つは同種のものとみてよかろう。これもきわめて簡単に「だ」型文を想定することができる。ただし、この「だ」がどんな述語の代用をしているのかは問題である。

⑫a. （その）青年は 20 歳だ

　b. 20 歳の青年

⑬a. 流通手段は多様だ

　b. 多様の流通手段

以下、簡単なものは用例のみ示す。

(10)「材料」

⑭a. （その）橋は丸大棒でつくった→（その）橋は丸大棒だ

　b. 丸大棒の橋

⑮a. （その）きものは木棉で織られている→（その）きものは木棉だ

　b. 木棉のきもの

(11)「数量・順序」

⑯a. 参院内勢力は 100 名だ

　b. 100 名の参院内勢力

⑰a. 大資本家は少数だ

　b. 少数の大資本家

(12)「サ変動詞の語幹が名詞に続く」

漢語サ変動詞に関しては、特殊な問題があるが、ここで簡単に処理しておく。

⑱a. 国際マラソンは本社後援だ

b. 本社後援の国際マラソン

（14）「後続体言の範囲・領域」

⑲a. （その）食物は母乳以外だ

b. 母乳以外の食物

⑳a. （その）課題は明治維新以来だ

b. 明治維新以来の課題

（15）「目的の事物・関与物」

㉑a. （あの）愛嬌は客寄せだ

b. 客寄せの愛嬌

㉒a. 講演は哲学（について）だ

b. 哲学（について）の講演

（16）「同格」

㉓a. テイラー軍曹が御主人だ

b. 御主人のテイラー軍曹

㉔a. 名目は生活補助費だ

b. 生活補助費の名目

（17）「形式名詞への接続」

『現代語の助詞・助動詞』があげている「～のため」「～の通り」を、奥津氏は、形式名詞でなく、形式副詞と考えているし、「上」「下」などは形式名詞ではなく相対名詞と考えているが、とにかくこれも「だ」型文による連体構造と考えてよい。

㉕プロレタリア独裁が行われている下では…→プロレタリア独裁だ下では…→プロレタリア独裁の下では…

（18）「後続するサ変動詞の動作の主語」

（19）「後続するサ変動詞の動作の目的語」

この種の名詞句に生ずるあいまいさは、すでに指摘したが、このあいま

いさも、「だ」による述語代用と、その連体形として説明できるだろう。

㉖a. 指摘はＡ博士がした→指摘はＡ博士だ

b. Ａ博士の指摘

㉗a. 封鎖は西欧地区にした→封鎖は西欧地区だ

b. 西欧地区の封鎖

漢語サ変動詞についての上のような解釈には、なお問題はあるかと思う。要は、「Ａ博士」は「指摘する」の主語、「西欧地区」は「封鎖する」の目的語であるというちがいであるが、なお考えるべき問題である。

(20)「「ようだ」「ごとし」で受ける」

「ごとし」は文語体だからしばらくおくとして、「よう」は形式副詞と考えたいが、とにかくこれも「だ」型文を含むと考えていい。

㉘彼はリスだように素早い→彼はリスのように素早い

(21)「形容「～のような」」

これも実は２０と同種としていいはずである。いわゆる「如しの」であって、富士谷成章以来しばしば指摘されるものであるが、これも次のように「だ」型文の連体形であることは、すぐに理解されよう。

㉙a. 世の中は夢だ

b. 夢の世の中

以上 21 種のほか、すでに述べたように、格助詞に「の」が続き、名詞を修飾する場合も「だ」型文の連体形である。

2.2.3　「の」の前に立つ格助詞の消去。

「だ」の場合はすべての格助詞が「だ」の前に立ち得るので、その消去は任意であった。しかし、「の」の場合は、あるものは消去を必須とし、あるものは任意となる。

次の例は消去を必須とする。

①　正宗が　うった名刀→

　　正宗が　だ　　名刀→

？正宗が　の　　名刀→

　　正宗　　の　　名刀

つまり、主格助詞の「が」について、「その名刀は正宗がだ」はまだしも認められるかも知れないが、「だ」が「の」になった場合、「？正宗がの名刀」は認められない。

②　ウナギを　注文したボク→
　　ウナギを　だ　　ボク→
？ウナギを　の　　ボク→
　　ウナギ　　の　　ボク

目的語格の「を」も、「ボクハ　ウナギヲ　ダ」は何とか許されるであろうが、「？ウナギを　のボク」は認められないから、「の」の前の「を」は必ず消去する。また目的語ならずとも、移動格の「を」も消去を必要とするようだ。

③　高速道路を　走る車→
　　高速道路を　だ　車→
？高速道路を　の　車→
　　高速道路　　の　車

「ニ」は時格・所格・目標格など、いずれの場合でも消去しなければならない。

④　名古屋大学に　属するK教授→
　　名古屋大学に　だ　　K教授→
？名古屋大学に　の　　K教授→
　　名古屋大学　　の　　K教授

⑤　3時に　始まる試合→
　　3時に　だ　　試合→
？3時に　の　　試合→
　　3時　　の　　試合

⑥　子供に　やるお土産→
　　子供に　だ　お土産→
？子供に　の　お土産→
　　子供　　の　お土産

⑦　月に　行く使者→

　　月に　だ　使者→

　？月に　の　使者→

　　月　　の　使者

上例の中で⑥や⑦は、「ニ」の代わりに「へ」を使えば消去の必要はない。

⑧a. 子供へのお土産

b. 月への使者

このように「が」「を」「に」は「の」の前で消去しなければならない。そのほかの格助詞は、次のように、任意に消去することができる。

⑨ここでの生活→ここの生活

⑩月よりの使者→月の使者

⑪オーストラリアからの学生→オーストラリアの学生

⑫病気での欠席→病気の欠席

ただし、次の場合は、格助詞の消去を許さないようにも思える。

⑬アメリカとの戦争→？アメリカの戦争

⑭10 時からの銀行→？10 時の銀行

⑮5 時までの銀行→？5 時の銀行

格助詞の消去の条件：

Ｘ　Ｃ　ｄ　Ｔｅｎｓｅ　Ｙ→

Ｘ　　ｄ　Ｔｅｎｓｅ　Ｙ

（１）もしＹがＮＰで始まり、且つＣが「が」「を」または「に」であれば、この変形は必須。

（２）もしＹがＮＰで始まり、且つＣが「と」「まで」「から」であれば、この変形を適用してはならない。

（３）そのほかの場合は任意。

［４］総括

奥津氏は『「ボクハ　ウナギダ」の文法』（1973 年　くろしお出版）で、「の」の意味用法を、大槻文彦氏（1897）の１０種類、三矢重松氏（1908）の１６種類、国立国語研究所（『現代語の助詞・助動詞』　1951）の２０種

類をまとめ直して、２１種類に分類した。この 21 種類の分析から、「の」の多義性は「だ」の多義性と対応すると指摘し、最後に「の」は「だ」の連体形だという結論を出した。

2.2　内間直仁氏の「の」についての研究

日本語助詞「の」の表す意味は多種多様で単純でない。文法辞典においては、「の」の結ぶ体言と体言の意味関係は単純ではなく、辞典関係の文献だけでなく、文法の研究書においても、「の」の表す意味は整理不可能だと述べている。この現況をふまえて、内間氏は「の」を介入しての体言と体言の意味関係はどう把握され、それに対して「の」はどんな役割を果たしているのかに関して、次の通りに整理した。

2.2.1　連体助詞「の」の表現構造

［1］「の」は格関係を内包する

格関係というのは体言が他の語に対してもつ論理的関係（1 つの意味関係）のことをいう。

基本構造：Ａ体言＋格助詞＋活用語連体形＋Ｂ体言

例：図書館が発行する本。

（1）Ａ体言＋の＋Ｂ体言

この「Ａ体言＋の＋Ｂ体言」の形式は、具体的な文脈や場面からはなれると、Ａ体言とＢ体言の意味関係がきわめて曖昧となる。例えば、「石原裕次郎の本」は 3 つの理解がある。1 つは石原裕次郎が書いた本、2 つは石原裕次郎が所有している本、3 つは石原裕次郎について書いた本である。

ア.「ガ＋活用語連体形」が内包されていると解されるもの。（ここで内包されているとみて示す＜　＞内の形式は、あくまでも 1 つの例にすぎない。）

①蛙の声。＜ガ鳴く＞

②日本女性の優しさ。＜ガ持つ＞

③私の心。＜ガ持つ＞

④自分の恋人。＜ガ交際している＞

イ.「ヲ＋活用語連体形」が内包されていると解されるもの。

⑤二十ワットの電灯。＜ヲ放つ。ヲ消費する＞

⑥三年制の高校。＜ヲとる＞

ウ.「ニ＋活用語連体形」の格関係を内包していると解されるもの。

⑦京都の友人。＜ニ住んでいる＞

⑧三番目の駅。＜ニある＞

エ.「ト＋活用語連体形」の格関係を内包していると理解される諸形式。

⑨東京の都。＜トいう＞

⑩博士の称号。＜トいう＞

「ト」の格関係が内包されている場合は、「という」の関係がほとんどである。それ以外の場合は、「ト」は外形化し、（４）構造の連体修飾の形をとる。たとえば、「友たちとした約束」は、「友たちとの約束」となり、「ト」は外形化し、内包化することはない。

オ.「カラ＋活用語連体形」が内包されていると解されるもの。

⑪従来の気象観察。＜カラ行われてきた＞

⑫田植が行われるようになって以来の古い問題。＜カラある＞

カ.「デ＋活用語連体形」が内包されていると理解されるもの。

⑬ワルソーの東欧外相会議。＜デ行われる＞

⑭広島の学会。＜デ行われる＞

以上のように、「Ａ体言＋の＋Ｂ体言」の連体修飾形式には「ガ、ヲ、ニ、ト、カラ、デ」の格関係が内包されている。次に、この「Ａ体言＋の＋Ｂ体言」の構造の場合、文脈や場面によっては、異なる２つ以上の格関係に解釈されうるものもある。すなわち、異なる２つ以上の格関係を内包しているともられるものである。例えば、「ガ、ヲ」のどちらにも解釈されうる次のような例がある。

⑮秒針の音。＜ガ動く。ヲ動かす＞

⑯薬の袋。＜ガ入った。ヲ入れた＞

⑰私の本。＜ガ書いた。ヲ書いた。ニ所属する＞

⑱これはだれの絵か。＜ガ描いた。ヲ描いた。ニ所属する＞

このように「の」は異なる２つ以上の格関係を表しうるから、超論理的といわれるのであるが、しかし、これら内包されている複数の格関係は同一文脈、同一場面で同時にあらわれるものではなく、具体的文脈においては、どちらか１つの格関係に規定されて用いられる。ただし、文脈や場面が十分に説明しえていると話し手がとらえていても、実際はそうでない場合には意味の曖昧さを伴うこともまた事実である。

（２）Ａ体言＋の＋活用語連用形＋Ｂ体言

これは「Ａ体言＋の」と「Ｂ体言」との間に「活用語連用形」があらわれるものである。構造的には、（２）の形式は（１）の形式にかなり近いが、Ａ体言とＢ体言の意味関係をよりよく明示しうる点では、（１）の形式と異なっている。

①仕事の進み具合

この連用形は名詞性の強いもので、既に述べたように、「連用形＋Ｂ体言」で複合名詞を形成する。従って、概括的構造分類では、（１）の「Ａ体言＋の＋Ｂ体言」の中に含まれてもよいのである。この構造をもつ連体修飾形式には次のようなものがあり、＜　＞に示した「格助詞＋活用語連体形」が内包されているものと理解される。

②私の思い人。＜ガ思う＞

③口のきき方。＜ヲきく＞

④掲示板の貼り紙。＜ニ貼る＞

これらは、例えば「私が想う想い人」「口をきくきき方」「掲示板に貼る貼り紙」と表現するところを、自明なる「が想う」「をきく」「に貼る」を内包化して表現を簡略化し、「私の想い人」「口のきき方」「掲示板の貼り紙」としたものである。このように、この構造では、格助詞の「ガ、ヲ、ニ」とそれらが格関係を結ぶ「活用語連体形」が内包化されていることが分かる。ただし、その内包されている連体形は、「の」の下にある連用形で容易に喚起されるし、その喚起された連体形とＡ体言で内包されている格助詞もたやすく喚起されうるようになっている。従って、Ａ体言とＢ体言の意味関係は、（１）の構造よりも比較的固定されていて、把握されやすい。

（３）Ａ体言＋の＋連体形１＋Ｂ体言

この構造の用例は次のようになる。

①駅前にある大きいお店→駅前の大きいお店

②国境にある長いトンネル→国境の長いトンネル

③夏における短い期間→夏の短い期間

④ヨーロッパにおける長い旅→ヨーロッパの長い旅

この構造と外形上全く似ているのが後述の（５）の構造である。しかし、この構造における「連体形１」と（５）の構造における「連体形２」とは、係りうけ関係が全く異なる。「連体形」を１と２で区別した理由はそこにある。この構造における「連体形１」と「Ｂ体言」は修飾と被修飾の関係にあって、「連体形１」は「Ｂ体言」の内容を限定している。従って、この場合も「の」の背後で省略されている格関係が比較的喚起されやすくなっている。この点では（２）の構造とほぼ同じであるが、（２）の構造では「連用形」と「Ｂ体言」の結合度が強く、「連体形＋Ｂ体言」で複合語を形成し、それ全体で一語一成分となっているのに対し、（３）の構造では、既に述べたように、「連体形１」と「Ｂ体言」は修飾と被修飾の関係にあり、それぞれが一語一成分となっている。この点は異なる。

（４）Ａ体言＋格助詞＋の＋Ｂ体言

この構造において外形かする格助詞は、比較的自明ならざる格関係を表す「へ、と、から、で、より」などの格助詞で、これらの格助詞には「の」が下接しうる。Ｂ体言は動作･状態性概念を含んだ体言である場合が多い。

①中国への旅

②クラスメートとの検討

③父からの手紙

④東京での生活

⑤月よりの使者

これらの表現は、意味的には次のように把握されているものと考えられる。

⑥中国へ行く旅

⑦クラスメートと交わす（する）検討
⑧父から来る手紙
⑨東京で送る生活
⑩月より来る使者

いわゆる、「の」の上の格助詞「へ、と、から、で、より」が関係を結ぶべき動詞などが本来あるべきはずであるが、その動詞が文脈などにより自明であるが故に内包化されているものと考えられる。また、Ｂ体言が「連絡、検討、命令、手紙、事故、生活、欠場、使者」などのように、動作性概念を含んだ体言であることもあって、内包化されている連体形が比較的容易に喚起されうる。

これらの現象を渡辺実『国語構文論』では、格助詞の有形無実化現象とみている。すなわち、「へ、と、から、で、より」などの格助詞は、形と意義とは残しつつも、用言にかかるという本来の文法的働きは失われたものとみている。しかし、表現理解の立場からみれば、やはりこれらの格助詞の下に、それらと格関係を結ぶ活用語連体形が内在しているとみた方がよい妥当であろう。

他の用例もあげて、その内在する連体形を＜　＞に入れて示すと、以下のようになる。

⑪子供への土産。＜あげる＞
⑫中国との国交。＜交わす＞
⑬長崎からの手紙。＜来た＞
⑭銀座での出来事。＜起こる＞
⑮友よりの贈り物。＜いただいた＞

以上のように、内包化されているとみられる連体形は、外形化している格助詞およびＡ体言、Ｂ体言をみれば、容易に喚起しうるものである。もちろん、ここで示した連体形のみが喚起されるといえば、そうではなく、その喚起の範囲には多少のゆとりがある。例えば、「君への手紙」は「書く、送る、あげる」が内包されているとしたが、文脈によっては、「書いた、送った、あげた、渡した」などである可能性もある。こういう細かい表現差

まで注意してみると、ここで＜　＞で示した連体形だけではとどまらない。しかし、それでも無制限に広がるのではなく、やはり各々の格助詞が要請する連体形には限りがある。しかも、内包化されている連体形は複数にまたがるといっても、これは抽象的に考えたときにそうなるのであって、具体的な文脈や場面などでは、「書く」なのか「送る」「あげる」「渡す」なのか、あるいは「書いた」「送った」「あげた」「渡した」なのかぴたっと決まるものと理解される。少なくとも話し手においては、2 つ以上の連体形を含めた言い方はしていない。だからこそコミュニケーションとして成り立つものと考えられる。

（５）Ａ体言＋の＋連体形２＋Ｂ体言

この構造の例を示すと、次のようになる。

①千鶴子が居ない人生は考えられない→千鶴子の居ない人生は考えられない

②内容が貧弱な新教育制度が出来た→内容の貧弱な新教育制度が出来た

この構造は、外見上は（３）の構造と似ているが、「連体形」の働きが全く異なる。（３）の構造の「連体形１」は、既に述べたように後続の「Ｂ体言」と修飾被修飾の関係を結んでいるのにたいし、（５）の構造の「連体形２」は「Ａ体言」といわゆる主述関係を結んでいる。（３）の構造の「連体形１」と区別して（５）の構造の「連体形」を「連体形２」とした理由はそこにある。

以上の（１）から（５）にかけての構造に現れる「の」は、背後に格関係の省略を包み込んで用いられたものであるが、その省略されている格関係は、具体的な文脈や場面では、「の」を通していつでも容易に喚起され得るという条件のもとで省略を受けているものと解される。以上が「格関係を内包する「の」」である。

［２］「の」は連用修飾関係も内包する

「の」は連用修飾関係も内包する。例えば、次の例においては、＜　＞の中に示した被連用修飾成分が内包されていると解釈される。

①ゆっくりの歩行。＜歩く＞

②よほどの事情。＜深い＞

これらは「ゆっくり歩く歩行」、「よほど深い事情」とあるべきところを、「歩く」「深い」が文脈などにより自明であるが故に内包されているものと理解される。これを構造的にとらえると、「連用修飾成分＋の＋Ｂ体言」となる。

（１）体言が副詞的に用いられて連用修飾成分となり、それに「の」が下接した例がある。

①明春の参議員選挙。＜行われる＞

②最近の手数料。＜かかる＞

③昨年の事故。＜起こった＞

④三十年の間。＜経つ。過ごす＞

（２）副詞からなる連用修飾成分に「の」が下接した例としては、次のようなものである。

⑤シトシトの雨。＜降る＞

⑥ガヤガヤの声。＜する＞

⑦ビッショリの汗。＜かく＞

⑧チョットの間。＜した＞

（３）形容詞の連用修飾成分となるが、これにも「の」は下接する。

㉟多くの船。＜ある。数える＞

㊱現在よりも多くの外国船が中国に出入りすることを・・・・・・。＜なる＞

㊲近くの店。＜位置する＞

㊳遠くの山々。＜見える＞

以上のように、「の」は連用修飾関係も内包していると解される。

［３］「の」は接続関係も内包する

文の成分関係に接続関係を認めるか否か、認めるとすれば、どういうものを接続関係とするかという問題があるが、ここでの接続関係というのは、活用語と活用語をいわゆる接続助詞で結んだ関係である。広い意味での連用関係とみることもできよう。この接続助詞に「の」が下接し、接続助詞

が本来かかっていく活用語は自明なるものとして内包される場合がある。

①本を読んでの感想。＜抱く。持つ＞

②見ての上。＜判断した。分かった＞

③社会的動物としての人類。＜存在する＞

④よく考えての決心。＜決める＞

[４]並列助詞、副助詞などに下接した「の」

「の」は、並列助詞や副助詞などにも下接して用いられる。並列助詞に下接してつくられる連体修飾には、格関係と、連用修飾関係が内包されている。

①家と家との間。＜がある＞

②あれかこれかの選択。＜を選ぶ＞

③生きるか死ぬかの瀬戸際。＜がわからない＞

④雨は降るし電車は混むしの災難。＜する＞

次に、副助詞に下接してつくられる連体修飾にも、格関係と連用修飾関係が内包されていると考えられる。

⑤二人だけの秘密。＜が持つ＞

⑥ワザワザ行っただけのことはあった。＜にあたる＞

⑦できるだけの事はします。＜やる＞

⑧書くだけの手紙。＜にする＞

[５]助動詞「だ」の連体形「の」

「の」の中には、助動詞「だ」の連体形として認められるものもある。これは、「の」による連体修飾形式を、具体的な基本構造の連体修飾形式になおしてみたとき、「である」の関係で結ばれているものである。Ａ体言とＢ体言が同格関係で結ばれているものは、ほとんどそれにあたる（ただし、次の用例の中には格関係を内包する「の」にも解釈できるものがある）。

①係りの少年。＜である。をしている＞

②女の子。＜である＞

③バラック建ての長屋の売店。＜である＞

④休みの日。＜である＞

この場合は、「である」に解したときは助動詞「だ」の連体形と解釈されるし、「に見える」に解したときは連体助詞「の」と解釈されることになる。

[６]形容動詞の連体形語尾の「の」

形容動詞を認めるか否かという大きな問題はあるが、内間直仁氏は一応認める立場をとっている（筆者もこの立場をとっている）。形容動詞の連体形語尾「の」は、次の点で連体助詞や助動詞の「の」と区別される。

（１）上接形式（いわゆる語幹）が性質・状態を表す。

（２）「の」が「な」にも代置しうる。

（３）「の」が「である」におきかえられる。

その諸例を示すと、次のようになる。

①ケチンボウの人。＜である＞

②ワズカのお金。＜である＞

③特殊のカメラ。＜である＞

④四角の土地。＜である。になっている＞

⑤イロイロのもの。＜である＞

⑥必要のもの。＜である＞

2.2.2　準体助詞「の」の表現構造

[１]準体助詞の内部構造

準体助詞「の」は連体助詞「の」がその下の体言的資格だけを包摂する形で成立したものであるという見方が示される（渡辺実　1974 年『国語文法論』参照）。

改めて基本構造をもつ連体修飾と「の」による連体修飾、および準体助詞による表現形式の三者間における相互関係を示すと、「僕が持っている本を貸してやろう（基本構造）」→「僕の本を貸してやろう（「の」の連体修飾。格関係の内包化）→「僕のを貸してやろう（準体助詞。Ｂ体言「本」の内包化）、「桜で作ったたばこ入れはどこだ？（基本構造）」→「桜のたばこ入れは、どこだ？（「の」の連体修飾。格関係の内包化）」→「桜のはどこだ？（準体助詞。Ｂ体言「本」の内包化）」のようになる。これからすると、準体助詞というのは、「連体機能＋体言内包化」の内部構造をもつ助詞

だといえそうである。

［２］格関係を内包する連体助詞「の」の準体助詞化

（１）「Ａ体言＋の＋Ｂ体言」における「の」

この構造における「の」は、準体助詞へ転成可能である。ただし、これは文脈や場面などによりＢ体言が自明となっていることを前提とする。

①芥川が書いた『鼻』は面白い→芥川の『鼻』は面白い→芥川のは面白い

②人々が残した足跡を見る→人々の足跡を見る→人々のを見る

③蛙が鳴く声が大きい→蛙の声が大きい→蛙のが大きい

④日本女性が持つ優しさが尊い→日本女性の優しさが尊い→日本女性のが尊い

以上のように「が」の格関係を内包している「の」は、Ｂ体言をも内包して準体助詞へ転成しうる。ただし、「Ａ体言＋の＋Ｂ体言」の全体で複合語的になっている場合の「の」は準体助詞化することは難しい。

⑤気がするせいにする→気のせいにする→×気のにする

「を」の格助詞を内包する「の」も準体助詞へ転成可能である。

⑥三十ワットを放つ電灯が必要だ→三十ワットの電灯が必要だ→三十ワットのが必要だ

⑦三年制をとる高校が多い→三年制の高校が多い→三年制のが多い

⑧日本を象徴する旗をあげる→日本の旗をあげる→日本のをあげる

（２）「Ａ体言＋の＋活用語連用形＋Ｂ体言」における「の」

この構造は、Ａ体言とＢ体言の意味関係が曖昧となることをさけるために、「の」の下に名詞性の活用語連用形があらわれるものである。ということは、裏返せば、活用語連用形があらわれなければ、Ａ体言とＢ体言の意味関係はかなり曖昧になるか、あるいはそのような連体修飾形式は成り立ちにくいことを意味している。そこで、この構造では、「活用語連用形＋Ｂ体言」の部分が自明であれば、「の」は準体助詞へ転成しうるが、そうでない場合は準体助詞化しえない。

⑨彼が死ぬ死に様がすごい→彼の死に様がすごい→彼のがすごい

⑩私がやるやり方がすごい→私のやり方がすごい→私のがすごい

⑪口をきくきき方を知らない→口のきき方を知らない→×口のを知らない
⑫身を置く置き場がない→身の置き場がない→×身のがない
⑬仕事が進む進み具合を確かめる→仕事の進み具合を確かめる→？仕事のを確かめる
⑭ご飯を食べる食べ方が異なる→ご飯の食べ方が異なる→？ご飯のが異なる

以上の諸例で、準体助詞へ転成可能とみたもの（？や×のついてないもの）も、文脈や場面の強力な支持がないと通用しないであろう。ということは、「連用形＋Ｂ体言」の部分が自明ならざる要素であるということを意味するものと解される。

（３）「Ａ体言＋の＋連体形１＋Ｂ体言」における「の」の準体助詞化

この構造における「の」は準体助詞化し得ない。

⑮駅前の大きいお店で買う→×（近くの大きいお店でより）駅前ので買う

この場合は、Ｂ体言を取り込んだ準体助詞「の」を連体形１の後につけて表現を簡潔化する。

⑯駅前の大きいお店で買う→（近くの大きいお店でより）駅前の大きいので買う
⑰国境の長いトンネルを抜ける→（短いトンネルを抜けた後）国境の長いのを抜ける

（４）「Ａ体言＋格助詞＋の＋Ｂ体言」における「の」

この構造における「の」は、ほとんど準体助詞へ転成しうる。基本構造は必要としない限り省略する。

⑱学校への連絡が見つからない→学校へのが見つからない
⑲東京への道がわからない→東京へのがわからない

以上のように、文脈や場面の支持がないと多少すわりの悪いものもないわけではないが、その支えがあると、この構造の「の」はほとんど準体助詞化しうる。

（５）「Ａ体言＋の＋連体形２＋Ｂ体言」における「の」の準体助詞化

（３）の構造と同様、この構造における「の」も準体助詞化し得ない。

すなわち、「の」が「連体形２＋Ｂ体言」を取り込むことが出来ない。では、この構造の表現は、もうこれ以上簡潔化し得ないかといえば、これも（３）の構造と同様、Ｂ体言を取り込んだ準体助詞「の」を連体形２の跡につけて簡潔化し得る。

⑳千鶴子の居ない人生は考えられない→千鶴子の居ないのは考えられない

㉑内容の貧弱な新教育制度が出来た→内容の貧弱なのが出来た

［３］連用修飾を内包する「の」の準体助詞化

連用修飾を内包する「の」も準体助詞へ転成しうる。

①今日行われている教育は六三三制だ→今日の教育は六三三制だ→今日のは六三三制だ

②相当かかえる仕事をこなしている→相当の仕事をこなしている→相当のをこなしている

③全部ある業種から取り出す→全部の業種から取り出す→？全部のから取り出す

④ビッショリかく汗はさわやかだ→ビッショリの汗はさわやかだ→？ビッショリのはさわやかだ

以上、多少すわりのわるいものもあるが、副詞的に用いられた体言に下接した「の」、および情態の副詞に下接した「の」は、準体助詞へ転成可能のようである。

ただし、これまでと同様、Ｂ体言が形成名詞である場合は、準体助詞化はむずかしい。

⑤三十年経つ間にスッカリかわった→三十年の間にスッカリかわった→×三十年のにスッカリかわった

⑥チョットした間に起こる→チョットの間に起こる→×チョットのに起こる

また、程度の副詞や叙述内容になんらかの制約を与える副詞についた「の」も、準体助詞へ転成しにくい。

⑦一層の御活躍を祈る→×一層のを祈る

⑧すこしの食事を分ける→？すこしのを分ける

⑨全くの話が私も驚いた→×全くのが私も驚いた

次に、形容詞の連用形に下接した「の」も準体助詞へ転成しうる。

⑩近くの店につとめる→近くのにつとめる

⑪遠くの山々が美しい→遠くのが美しい

⑫多くの船が出入りする→？多くのが出入りする

［４］接続成分を内包する「の」の準体助詞化

接続成分を内包する「の」も、文脈の強力な支持があれば、準体助詞へ転成しうるようである。

①本を読んだの感想も述べる→（映画を見ての感想も述べるが、）本を読んだのも述べる

②よく考えての決心が大切だ→（即座の決心も重要だが、）よく考えてのが大切だ

③社会的動物としての人類に課された課題だ→？社会的動物としてのに課された課題だ

④うまくいけばの話だがね…→？（これから話す話は、）うまくいけばのだがね

ただし、この場合も、「見ての上」などのような、Ｂ体言が形式名詞の時は、準体助詞へ転成しにくいようである。

［５］並列助詞、副助詞などに下接した「の」の準体助詞化

並列助詞に下接した「の」も、文脈の支持があれば、準体助詞へ転成しうる。

①家と家との間にはさまる→（木と木との間にではなく、）家と家とのにはさまる

②あれかこれかの選択はきつい→（二者択一を要しない選択はいいが、）あれかこれかのはきつい

③寝たり起きたりの状態が続く→寝たり起きたりのが続く

副助詞に下接した「の」も準体助詞化しうるようである。

④ふたりだけの秘密は守る→ふたりだけのは守る

⑤泣かんばかりの表情を見せる→（普段は明るい表情をみせている者が今

度ばかりは）泣かんばかりのを見せる

　ただし、これも「行っただけのこと」「できるだけの事」「ここばかりの事」「私などのような」「始まるか始まらないかのうち」などのような形式名詞「こと、うち」、あるいは形式用言「ような」などにかかる「の」は、準体助詞へ転成しにくいようである。

［６］助動詞「だ」の連体形「の」の準体助詞化

　助動詞「だ」の連体形「の」も、文脈の支持があれば、準体助詞へ転成しうる。

①係りの少年が来る→係りのが来る

②バラック建ての長屋の売店で売っている→（町の立派な売店ではなく、）バラック建ての長屋ので売っている

　ただし、「女の子」「生みの親」など、全体が熟語的になっているもの、「議題の一つ」「卒業生の大半」「離乳法の一つ」など、Ｂ体言が数詞であるもの、「御主人のテーラ軍曹」「美人の奥さん」など、Ｂ体言が固有化名詞または敬語であるもの、さらに、「ひっこみ思案の性質のせい」「いやならやめるまでの事」「目下のところ」など、Ｂ体言が形式名詞であるものなどにおける「の」は、準体助詞化しにくいようである。これらは自明ならざるもので、特に、固有名詞や敬語は自明なるものとして内包させることはできない。また、「ひとりの政治家も存在しない」などのように「ひとりも～ない」の呼応関係にある文脈中の「の」、あるいは、「映画の面白いのを見よう」「ビールの冷やしたのが欲しい」などのような、Ｂ体言が既に準体助詞によってできているもの、「長方形植と正方形植との何れが…」など、Ｂ体言が疑問詞などである場合も準体助詞化はむずかしい。

［７］形容動詞の連体形語尾の「の」の準体助詞化

　形容動詞の連体形語尾の「の」も、文脈によって、準体助詞へ転成しうる。

①ケチンボウの人とはつきあわない→ケチンボウのとはつきあわない

②ワズカのお金をためた買う→ワズカのをためて買う

③四角の土地を買う→（細長い土地もあったが、）四角のを買う

ただし、「自然の事」「アタリマエの事」「平等の立場」など、B体言が形式名詞または形式名詞的である場合の「の」は、準体助詞化はむずかしいようである。

2.2.3　総括

内間氏は『沖縄の言語と共同体』(1990　社会評論社）や「助詞「の」と簡略化表現」(1996　和泉書院）で、日本語における連体修飾表現と簡略化表現との関係に着目し、「「の」による連体修飾の表現は、格関係・連用修飾関係・接続関係の省略（内包）のうえに成り立った表現であるとみている。さらに、「の」は後続の体言を取り込んで準体助詞化し、表現を一層簡略化する。」と論じ、日本語における連体修飾構造の仕組みを整理したうえで、「の」の表現が内包する格関係および修飾関係などの表現構造を明らかにした。

2.3　論文のまとめ

主な説を整理して、「の」の文法的用法と表現構造は表５の通りになる。

表５

<table>
<tr><th>文法的用法</th><th colspan="2">表現構造</th></tr>
<tr><td rowspan="9">連体助詞</td><td rowspan="5">格関係を内包する</td><td>「Ａ体言＋の＋Ｂ体言」</td></tr>
<tr><td>「Ａ体言＋の＋連用形＋Ｂ体言」</td></tr>
<tr><td>「Ａ体言＋の＋連体形１＋Ｂ体言」</td></tr>
<tr><td>「Ａ体言＋格助詞＋の＋Ｂ体言」</td></tr>
<tr><td>「Ａ体言＋の＋連体形２＋Ｂ体言」</td></tr>
<tr><td rowspan="3">連用修飾関係を内包する</td><td>体言が副詞的に用いられて連用修飾成分となり、それに「の」が下接する</td></tr>
<tr><td>副詞からなる連用修飾成分に「の」が下接する</td></tr>
<tr><td>形容詞の連用形も連用修飾成分となるが、これにも「の」は下接する</td></tr>
<tr><td colspan="2">接続関係を内包する</td></tr>
<tr><td>助動詞</td><td colspan="2">助動詞「だ」の連体形</td></tr>
<tr><td>形容動詞</td><td colspan="2">形容動詞の連体形語尾</td></tr>
<tr><td rowspan="10">準体助詞</td><td rowspan="7">格関係を内包する連体助詞「の」の準体助詞化</td><td>「Ａ体言＋の＋Ｂ体言」における「の」は準体助詞へ転成しうる</td></tr>
<tr><td>「Ａ体言＋の＋活用語連用形＋Ｂ体言」における「の」は、強力な文脈の支持があれば、準体助詞化しうるが、そうでない限り、ほとんど準体助詞化しえない</td></tr>
<tr><td>「Ａ体言＋の＋連体形１＋Ｂ体言」における「の」は準体助詞化し得ない</td></tr>
<tr><td>「Ａ体言＋格助詞＋の＋Ｂ体言」における「の」は、ほとんど準体助詞へ転成しうる</td></tr>
<tr><td>「Ａ体言＋の＋連体形２＋Ｂ体言」における「の」は準体助詞化し得ない</td></tr>
<tr><td>「活用語連体形＋Ｂ体言」において、Ｂ体言が自明なる場合、連体形の下に連体助詞「の」が下接し、それがＢ体言を内包して準体助詞へ転成することもある</td></tr>
<tr><td colspan="2">連用修飾を内包する「の」も準体助詞へ転成しうる</td></tr>
<tr><td colspan="2">接続成分を内包する「の」も、文脈の強力な支持があれば、準体助詞へ転成しうるようである</td></tr>
<tr><td colspan="2">並列助詞に下接した「の」も、文脈の支持があれば、準体助詞へ転成しうる</td></tr>
<tr><td>助動詞</td><td colspan="2">助動詞「だ」の連体形「の」も、文脈の支持があれば、準体助詞へ転成しうる</td></tr>
<tr><td>形容動詞</td><td colspan="2">形容動詞の連体形語尾の「の」も、文脈によって、準体助詞へ転成しうる</td></tr>
</table>

第２章　まとめ

辞典と論文の先行研究を通して、筆者は「の」の表現構造および用法を表６の通りにまとめた。

表６

<table>
<tr><td colspan="2">表現構造</td><td colspan="3">用　　法</td></tr>
<tr><td>基本構造</td><td>派生構造</td><td>文法的用法</td><td colspan="2">具体的用法</td></tr>
<tr><td rowspan="7">Ａ体言
＋
格助詞
＋
連体形
＋
Ｂ体言</td><td>Ａ体言＋の＋Ｂ体言</td><td rowspan="7">連体助詞</td><td rowspan="7">内包格関係を具体化・個別化する</td><td>「が＋活用語連体形」を内包する</td></tr>
<tr><td>Ａ体言＋の＋連用形＋Ｂ体言</td><td>「を＋活用語連体形」を内包する</td></tr>
<tr><td>Ａ体言＋の＋連体形１＋Ｂ体言</td><td>「に＋活用語連体形」を内包する</td></tr>
<tr><td>Ａ体言＋格助詞＋の＋Ｂ体言</td><td>「と＋活用語連体形」を内包する</td></tr>
<tr><td>Ａ体言＋の＋連体形２＋Ｂ体言</td><td>「から＋活用語連体形」を内包する</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2"></td><td>「で＋活用語連体形」を内包する</td></tr>
<tr><td>「へ＋活用語連体形」を内包する</td></tr>
<tr><td colspan="2">副詞・状態詞＋の＋体言</td><td colspan="2">修飾関係を具体化・個別化する</td></tr>
<tr><td colspan="2">助動詞＋の＋体言</td><td>助動詞</td><td colspan="2">助動詞「だ」の連体形</td></tr>
<tr><td colspan="2">形容動詞＋の＋体言</td><td>形容動詞</td><td colspan="2">形容動詞の連体形語尾</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="5">体言および用言の連体形
＋
の</td><td rowspan="4">準体助詞</td><td colspan="2">体言について「…のもの」の意を表す</td></tr>
<tr><td colspan="2">用言の連体形について、「もの」「こと」などの意を表す</td></tr>
<tr><td colspan="2">用言の連体形について全体を体言化し、下に助動詞「だ（です）」をつけ、「…のだ（です）」の形で、ある事柄について断定的に、あるいは説明的に述べる場合に用いる（口頭語では「ん」となることがある）</td></tr>
<tr><td colspan="2">助動詞「ようだ」「ごとし」の内容を表す</td></tr>
<tr><td rowspan="2">並列助詞</td><td colspan="2">事物を並べあげて問題にする。同類を集めたり、反対のものを比較したりする</td></tr>
<tr><td colspan="2">ある活用語とその否定形とを重ねて上の語の意味を強める</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">文末あるいは
活用語の連体形および終止形＋の</td><td rowspan="3">終助詞</td><td colspan="2">断定の意を表す</td></tr>
<tr><td colspan="2">質問・確認を表す</td></tr>
<tr><td colspan="2">命令を表す</td></tr>
</table>

表６からみると、「の」の表現構造と用法ははっきり分かってきた。「の」の文法的な用法を連体助詞、準体助詞、並列助詞と終助詞に分かれている。各用法の表現構造および表す意味は表６の通りである。ここで、検討する

必要があるものについて述べる。

１．格助詞か連体助詞かについて

筆者は調べた『日本文法大辞典』(1971 年　松村明編)、『日本語教育事典』(1982 年　日本語教育学会編)、『日本語大辞典（第二版)』(1995 年　梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義・日野原重明監修）と『明鏡国語辞典』(2002 年　北原保雄編）の 4 冊の辞典の中に連体修飾の部分は全部「格助詞」と認めている（Ｐ95～96 表１参照)。この「の」を、所有格を示す格助詞とする説は、筆者は賛成できない。

格関係というのは体言が他の語に対してもつ論理的関係（1 つの意味関係）のことをいう（内間　1990 年)。格助詞というものは格関係を担う助詞で、「連体助詞」とはまったく別の概念である。日本語の中に「が（主体資格)」、「を（目的格)」、「に（帰着格)」、「へ（方向格)」、「と（共同格)」、「から（出発格)」、「で（手段、場所格)」と「より（比較格)」の 8 つの格助詞しかない。そこで、「の」は格助詞ではなく、別種の助詞であって、体言に添うものだから「準副体助詞」とする、というのが橋本文法である。準副体助詞（「の」）は、山田氏は格助詞に収めたが、これは体言以外の種々の語にも附き、又格助詞と重ねて用いられる故（「父からの手紙」「ここでの相談」など)、格助詞とは別にした方がよい。これは常に体言に連続し、この点で副体詞と性質を同じする所から、準副体詞と名づけたが、場合によって副体詞と関係せしめず、単に「連体助詞」と名づけてもよい（橋本 1948 年)。だから、連体修飾の用法の「の」は「連体助詞」と名づけ、「格助詞」ではない。

２．格助詞と「の」の関係

内間直仁氏の説によって、連体修飾構造は次の通りで示された。

基本構造：

Ａ体言＋格助詞＋連体形＋Ｂ体言　花が咲く季節。

（１）Ａ体言＋の＋Ｂ体言　　花の季節。

（２）Ａ体言＋の＋連用形＋Ｂ体言　　身の置き場。私のやり方。

（３）Ａ体言＋の＋連体形１＋Ｂ体言　　国境の長いトンネル。

（４）Ａ体言＋格助詞＋の＋Ｂ体言　　友達との話がある。

（５）Ａ体言＋の＋連体形２＋Ｂ体言　　千鶴子の居ない人生。

格助詞と「の」の関係は次の通りで示された。

```
          ┌×が┐
Ａ体言＋│×を│＋連体形２＋Ｂ体言
          └×に┘

          ┌へ　┐
          │と　│
Ａ体言＋│から│＋×連体形２＋Ｂ体言
          │で　│
          └より┘
```

連体修飾の基本構造では、「Ａ体言＋格助詞＋連体形＋Ｂ体言」の部分が格関係を表す。（４）構造では、「格助詞（へ、と、から、で、より）」が顔出ししているから、それらと格関係を結ぶ「連体形」は自明なるものとして省略されている。（５）の構造では、「格助詞（が、を、に）」が顔出しできないから、「連体形２」が顔出ししているのである。すなわち、（４）構造において、顔出ししている「格助詞（へ、と、から、で、より）」が格関係を結んでいるのは「の」の背後に省略されている「連体形２」であり、（５）構造において、顔出ししている「連体形２」が格関係を結んでいるのは、「の」の背後に省略されている「格助詞（が）」なのである。従って、「千鶴子の居ない人生」において、「居ない」が主格関係を結んでいるのは「の」背後に省略されている「が」であって、「の」ではない。「の」は体言「千鶴子」と体言「居ない人生」を結びつけているだけである。「の」は主格を表さない。なお、「の」の前で顔出しし得ない「を、に」の場合は、（２）の構造を取る。

参考文献（五十音順）

１．内間直仁著(1990 年)　『沖縄言語と共同体』　社会評論社

２．内間直仁著（1994 年）　『琉球方言助詞と表現の研究』　武蔵野書院

３．内間直仁著（1996 年）　「助詞「の」と簡略化表現」(『研究業書』)　和泉書院

４．梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義・日野原重明監修（1995 年）　『日本語大辞典（第二版)』　小学館

５．奥津敬一郎（1978 年）　『「ボクハ　ウナギダ」の文法』ーダとノーくろしお出版

６．亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1989 年）　『言語学大辞典』　三省堂

７．北原保雄編（2002 年）　『明鏡国語辞典』　大修館書店

８．新村出編（2008 年）　『広辞苑（第六版)』　岩波書店

９．橋本進吉著（1948 年）　『国語法研究』　岩波書店

10．松村明編（1971 年）　『日本文法大辞典』　明治書院

11．松村明編（1989 年）　『大辞林』　三省堂